



山の下市場は心温まる市場

7月4日から7日まで子どもたちが作った七夕飾りで彩られた山の下市場

このあたりに露店が出始めたのは戦後間もなくだそう、現在、ここで店舗を構えている店のほとんどは、最初は露店だったんですよ」と、地元商店街で組織する三栄会の会長を務める荒川誠一さん(56)は話します。

三栄会では、ひとりでも多くの人から市場に足を運んでもらおうと、参加商店

国道113号の北葉町の交差点を海側に曲がると、そこは通称「山の下市場」。両側のアーケード下には、日用家庭用品、寝具、魚屋、だんご屋などのいろいろなお店と、採れたての旬の野菜や漬物などを販売する露店が対面する形で並んでいます。

中心に、在宅高齢者などを支援する活動が盛んです。同協議会は、小学校区ごとに4つの支会に分かれ、それぞれが世代交流やふれあい給食などを実施。6月22日には、山の下支会のふれあい昼食会が行われまし

盛んです! 地域の福祉活動



ふれあい昼食会では子どもたちが歌と踊りを披露

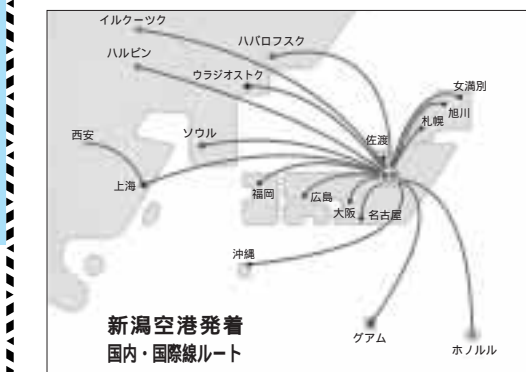


今年99歳を迎えた本郷さん

の園児23人が歌と踊りを披露。子どもたちとの交流は、参加したお年寄りからも大変喜ばれ、自然と顔がほころびます。

地域のボランティアの皆さんによるお手製の弁当を食べながら、あちこちで笑い声も響きます。「せっかく同じ地域に住んでいるのだから、お互いに元気をもらって支え合おうのは大事なこと」と大山さんは語ります。

99は「毎年1回、ここで知り合った友達と会うのを楽しみにしているんです。来年はもう100歳、頑張つてまた参加したい」と元気に話してくれました。



新潟空港

新潟空港は、昭和5年に市営飛行場として開場。昭和48年に新潟-ハバロフスク線の開設により国際空港となりました。現在、国際線はハバロフスクをはじめ、ウラジオストク、イルクーツク、ソウル、上海・西安、ハルビン、グアム、ホノルルの8路線、国内線は9路線が定期運航され、日本海側の拠点空港として多くの人(昨年度は約125万人)から利用されています。

空と海の玄関口

新潟西港(臨港・山の下ふ頭)

大正15年新潟臨港による臨港ふ頭が完成し、昭和2年に初めての都市計画で山の下が工場地帯に指定されたこともあり、臨港ふ頭はいわば工業港として国内外の貨物船が出入港していました。

山の下ふ頭には昭和49年に新日本海フェリーが小樽・新潟・敦賀航路を開設し、現在は秋田、苫小牧へも周航しています。河口寄りの岸壁には、2・3年おきに日本丸・海王丸などの帆船が寄港し、市民にその華麗な姿を見せてくれます。



小樽向け出航する新日本海フェリー

地震後、物見山や河渡、下山の砂丘地帯は急速に宅地化が進み、かつて松林だった面影はじゅんさい池周辺に残るだけになりました。両側に畑が並び、チューリップやアイリスの球根、さつまいも栽培が盛んに行われていた国道113号沿線も、今では商店が建ち並び、風景が一変しました。近年は、新潟鉄工所車両工場跡地が広大な住宅地に生まれ変わったり、信濃川を挟んで対岸の入船側と結ばれるみなとトンネルの工事が進むなど、これからも中地区は変わっていくでしょう。

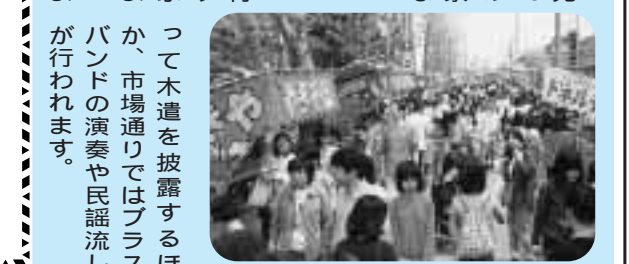
昭和39年6月16日の新潟地震で、市内でも被害の大きかったのは山の下でした。道路の地割れ、砂や泥とともに地下水が噴き出す液状化現象に加え、昭和石油新潟製油所の石油タンクが次々に炎上。信濃川や通船川の堤防が壊れ、津波が襲い、地区内の各所にあった石油タンクから漏れた重油が水と一緒に流れ出し、ゼロ地帯は黒い水に覆われました。

郷土芸能 山の下木遣 祭りには欠かせない



山の下木遣保存会の皆さん

つに結集するための作業唄として始まったといわれています。その後は、祭礼はもちろん、力作業の音頭として生活の中で受け継がれてきました。



たくさんの露店が並ぶ山の下祭り

現在では、昭和46年に発足した保存会(会員数は18人)が中心となって、山の下神明宮の祭り(山の下祭り)や市郷土芸能発表会などで披露しています。

4月28・29日と9月14・15日には、山の下祭りが行われます。毎年、露店がずらりと並び、たくさんのお客が訪れ、家族連れなどでにぎわいます。保存会や各町内会が集まると、市場通りではプラスパンドの演奏や民謡流しが行われます。

変わりゆく中地区

中地区は旧沼垂町、大形村、松ヶ崎浜村のそれぞれ一部から成り立っています。明治の初めにこの地区にあった地籍は、沼垂町の一部、山ノ下新田、河渡村(河渡新田)、松ヶ崎浜村のうちの下山だけでした。

明治28年に日本石油の機械工場として新潟鉄工所が建設されたのを皮切りに、明治から大正にかけて次々に工場が進出しました。昭和になると、港から運ぶ米を保管するための国立倉庫や新潟市営飛行場が完成。海岸沿いや通船川流域にも新しい工場ができ、社宅などに住む人が増えました。

戦後はベビーブームもあり、山の下小学校の児童数が急増。昭和25年に東山の下小学校が、同28年には桃山小学校が山の下小学校から分離し、開校しました。藤見中学校も山の下中学校から分離し、同36年に開校しました。